



「浦島さん！ 其後は。」

と、云ましたが、

「ヘッ…貴女様は…何人様で…」

と、また碌に挨拶もしません。

「アラ、お忘れになつたのですか、私は乙姫でございますよ。」

と云ふのがやうやく聞えましたが、

「ナニ乙姫様？ さう云へばなるほど乙姫様ぢやが、

私はこのさほり年を取つたのに、貴女はまた何時までもよくお若く居らつしやいますな。」



「貴君だつてお若いぢやありませんか。」

「ナニ、私が

若い？ 飛ん

でもない。私

に入らぬ物を

持たせて、明けるなな

と云ふものだから、かへつ

て明け度くなつたぢやないか。

明けたらたちまち毒氣にあた





つて、このとほり毫碌してしまつた。自分ばかり若くて居て、私だけこんな年取らせるとは、何と云ふひどい方だ。さア、元のとほりにして下ださい。それが否なら、このまんま、この龍宮に飼殺しにして、ついでに葬式までしてもらひましょよ。』

と、少し怒つて云ひました。
すると乙姫は、またうなづいて、

「いや〜、そんな悪いことはいたしません。あれは全く家來共の間違で、龜の年をしまつて置いた函を、ついお土産にしてしまつたのです。その代りに今度こ



そはほんとの玉手箱をあげますよ。さア龜共早くあれを！」

と云ひますと。小龜共は心得て、奥の寶物倉へ行つて、やがて立派な大きな箱を一つがつき出して來ますと、乙姫はそれを指して、

「さア、これが眞實の玉手箱です。』

と云ひますと、浦島は眼をバチバチさせて、

「やア、これは大きな物ぢや。これではとてもこの老人には、持つて行くことは出來んわい。』

「いや〜、それはご心配には及びません。この玉手



箱は持つて行かないでも、龜の子共が持つてつてあげます。その代り貴君は、この中へ入つていらつしやい！」

「チニ、この中へ？」

「エ、さうです。さうして龜の背に乗る代りに、龜の手で擔がせてあげます。それ皆の者！」

と云ふのを合圖に、ハツと云つて大勢の子龜が、玉手箱の蓋を取りますと、今度は乙姫が進みよつて、自分で浦島の手を取つて、手傳つて箱の中へ入れました。

浦島は只煙にまかれて、されるまゝになつて居まし



たが、箱へ入るごその上から、また蓋をされまして、グツと擔がれて動き出しました

たから、まるで

棺桶にでも入つ

た氣になり、さ

てはこのまゝお

寺へやられて、

お墓へ埋められ

てしまふのかと思ふと、

心細く





なつて、

「ア、南無阿彌陀佛々々々々々々」

と、念佛ばかり唱へて居ました。

その中にコトンと音がして、下に置かれたかと思ふと、紐を解く様な音がして、蓋をサツと取られます。バツと明るくなりました。

途端に子龜共が一時に、

「浦島様萬歳！」

と云ひますから、何故かと思つて念の爲めに、蓋の裏の光つて居る所に、自分の姿を寫しましたら、こは如



何に、何時の間にか自分は元の若い、浦島太郎になつて居ました。

鯉の口

上

山々の雪が解けるご、川々の水が殖える。時にはそれが殖え過ぎて、土手を越して畑につかる。さうなるご大變だと云ふので、百姓の田五兵衛は、自分の村の土手筋を、念の爲めに見てまはつて、少しでも土のゆるんで居る所があると、其所へ土俵を築き足したり、杭を打ち添へたりして居た。

所を通りかゝつたのは二人の旅僧だ。一人は年はも



う六十餘りの老人だが、今一人はまだ二十歳に、ならない位な、見るから可愛らしい小僧だつた。

小僧は田五兵衛を見ながら老人の旅僧に、

「お師匠さま！ あれは何をしてるんでせう？」

と聞くと、老僧は一寸ふりむいた許りで、

「あれは水の出ない様に、土手を堅めて居るのぢや。」

と云つた。

小僧は一寸考へたが、

「馬鹿な事をしてるもんだなア。」

ご、獨語を云ふと、老僧が聞きとがめて、



「なんの、馬鹿な事があるもんか。何事も用心が大切
…轉ばぬ先の杖と云ふ事もある。」
と、教へる様に云つたが、小僧はまだ冷笑つて、
「だつてお師匠さん！ あの土手より高い水が出る日
にやア、いくら土が堅まつてたつて、上を越されてし
まふぢやありませんか。」
かう云ふと老僧もうなづいて、
「なるほどそれも然うぢやなア。だが、小僧、それで
はあの土手を越さない様にするには、何うすればまた
可いだらうな？」



と、試験する様に尋ねた。
が、小僧は無造作に、
「それにやア川の底を掘つて、水を低くするんです。
それからまたその泥で、土手を尙高くすりやア、水の
越す事は無いぢやありませんか。」
と、云ひますので、老僧は感心しまして、
「お前はなかく、巧い事を云ふ。全くその通りぢや、
ではあの百姓に、その通り云つて教へてやれ。」
「ぢやア教へてやりませうか。」
「貢ふ子に教へられて、淺瀬を渡ると云ふ事もある。」



子供だつて馬鹿にはならんな。」

かう云ふ中に弟子の小僧は、チヨコくミ田五兵衛の側へ行つて、今の事を云つてやりました。

恰度その時、川の上面を泳いで居た一尾の鯉がありました。やがて今土手の上で、

「なるほど、それは好い事云つてくれなすつた。よし、それぢやア明日は村中の者にさう云つて、今の中にこの川を掻い干して、底を掘りさげる事にしやうよ。」
と、かう云ふ田五兵衛の聲が聞えましたから、さア鯉は驚きました。



「なんだ、川を掻い干して底を掘りさげる……

まつてくれ、川

を掻い干しやア

水が無くなる。

水が無くなりや

アおれ達は何うする。

くづつゝしてると百姓

達にみんな取られてしまふんだ。……

そんな目に會つてたまるものか。こ





りやかうしては居られんから、はやく皆に知らしてやらう。」

と、大急ぎで泳ぎさがつて、仲間の鯉の大勢居る所へ行つて、

「大變だ、えらい事になつたぞ。」

と、この話を傳へました。

鯉仲間こひなかは驚くまい事か。

「夏なつになつて早ひやくがつといひて、自然しぜんと水みづが涸かれるなら知らん事こと、漸やうやうく上の氷こほりが解とけて、水みづも温ぬくんで來こやうと云ふ矢や先に、無理むりに搔かい干ほされてたまるもんか。一體たいそ



んな事は誰たれが云いひ出したんだ？」と聞くと、

「それはまだ年の行かない、旅たびの小僧こそうの入智いれち恵まだよ。」

「ナニ、旅たびの小僧こそうだ。小僧こそうと云いやア坊主ぼうしゆの卵たまごだらう坊主ぼうしゆと云いやア慈悲なまよけを説とく筈はずだ。それが川かはを搔かい干ほさして、おれ達たち仲間なかを苦くるしめるなんて、殺生せつしやうな事を教をしへるとは、何なんと云いふ憎にくい奴やつだらう。よし、まだ遠とほくは行いつてまい。これから後あとをおつかけて、此この遺趣いしゆ返がへしをしなけりやア。」

と、氣きの速はやい鯉こひは跳はね出ださうしたが、



「これ／＼、そんなに力んだつて、先は陸を歩いてるんだよ。水の中に居るものによ、手出しをする事も出来ないぢやないか。」

こ、云はれて見ると、一言もなく、只切齒をする許りだ。

するこまた今迄黙つて居た一匹の鮒が泳ぎ出て、

「だが鯉さん！ その遺趣返しをするんなら、恰度好い所があるぜ。」

と云ふ。

「好い所とは何所だい、鮒さん！」



「いつも私等の仲間の寄るあの川上の渡船の所さ。旅の坊主と云ふ事なら屹度あの渡船を渡るだらう。其所をこつちで待ちふせて、川の中程まで来た所を、大勢で船を覆へしてやるのさ。」

かう云ふこ鯉共は、鰭を打つて賛成し、

「なるほごこれは名案々々！ 鮒さんは小さな軀だが、なか／＼智恵はあるんだネ。ぢやアうまく狙つて居てその小僧を川の中へ、生捕にしていぢめてやらう。」

こ、から相談がまこまると、鯉共は尾鰭をそろへ、その鮒を案内に立て、川上の渡船場へと急いだ。



此所は川幅が一番狭いが、その代りまた水は一番深い。

二〇六

鯉共は波の間から、そつと陸の方を見るに、今しも渡船は客を乗せて、彼方の棧橋をはなれやうとして居る。

そして、その客の中には、大きな笠をかぶつた、坊主らしいのが二人乗つて居た。

「居るぞく、彼奴だく！」

と云つて、一尾が伸びあがるに、

「シツ／＼静かに静かに！」



こ、一尾がおさへたがそれが、先にも聞えたさ見えて、小僧はこちらを振りむいた。

中

川の中での鯉の耳語、元より内證で云つたつもりだが、何しろ鯉の口は大きいから、聲は忽ち、船へも聞えたらしい。



1104



二〇八

で、小僧が此方をふりむいたから、今はもうこれ迄と、鯉共は急に尾鰭をふり立て、それで川の波を起して、船を覆しにかゝつて来た。船頭は驚くまい事か。「風もないこの天氣に、かう波が起るごは、こりや只事ぢやないぞ。きつご此船の中に、誰か川の神様の御意に入らない人が居るんだ。すまないがその人だけ、はやく此船を出してもらひ度いな。」

と、乗合の客を見渡した。

乗合の者は肝を消して、

「それは、何しろ大變だ。誰だか知らんがその人はは



やく陸へ逃げ上がるか、川の中へ飛び込むかして、私等を助けてもらはなけりやならん。」

と、一人が云へばまた一人が、

「それより此所に坊さまが居らつしやる、坊さまならお經の力で、波を静める事も出来やう。さア早くやつてください。」

と、切りに老僧に頼み込む。

老僧は仕方がなしに、珠數をもみ立て、拜みはじめたが、波は少しも静らない許りか、船はいよく傾ぎ出して、今にも引くるかへりさうになつた。



すると、例の小僧は、何思つたか老僧に、

「御師匠さま〜！ 御經なんぞは入りません。この川の波は私が、きつと静めて御覽に入れます。その代り御師匠様、この杖をいたゞいて参りますよ。」と、側に置いてあつた杖を取ると、南無阿彌陀佛も何とも云はず、そのまゝ川の中へ飛び込んだ。「アレ小僧さんが身を投げた。」と、騒ぎまはる船の中より、川の中では鯉共が、それと見て大喜びで、先を争つて食ひにかゝつたが、中でも一番大きな鯉が、大きな口をバクリとあけて只の一



と口に食ひにかゝつた。

元より覺悟

の小僧は、少しも恐れず自分の方から、わざとその口へ飛び込んだが、その時例の師匠の





杖を、ちやんと縦に立て、來たから、アグリとやつた。鯉の口の、上の顎も下の顎も、その杖に支へてしまつて、折角恐ろしい齒があつても、小僧を咬む事が出来なかつた。

その間に小僧はスルリと通つて、いきなり其鯉の腹の中へ、ズツと這ひ込んで行つてしまつた。

けれど、兎に角目指す小僧が、かうして鯉の腹へ呑み込んでしまつたから、これで腹の蟲も癒えた、他の鯉共も尾緒をしづめて、元の巢の方へと引揚げると、川はまた以前の通り、静かな流れになつてしまつた。



乗合の者はホツと一息。

「ヤレ、危い事だつた。これも和尚様のお蔭です。」と、云ふと、

「ナニ、和尚様より小僧様の御蔭だ。然しあの小僧様は、何の因果か知らないが、むざむざ川の神様に見込まれたもんだな。可哀さうに。」

と、氣の毒がるものもあつて、老僧をはじめ乗合の者は、云ひ合はせたやうに川の方を向いて、小僧の爲めに御經をあげやうとした。

するご遙かの川の中から、



「皆さん心配して下さいますな。小僧は無事に助かつて、もう直き歸つて参りますよ。」

さ、云ふのが、幽かに聞えるではないか。老僧は耳が遠いので、他の事は聞きかねて居たが、これ許りは耳に入つたさ見えて、

「ウム、なるほど流石に白念ぢや。」

さ、さも嬉しさに膝を拍つた。

が、他の者には解らない。

「一體あれは何さ云ふ事で御座いませう？ 老僧の御

弟子の事ですから、大方理由は御存じで御座いませ



う。」

と聞く。老僧はニツコリ笑つて、

「あの白念と云ふ小僧が、川の主に見込まれた事も、

また見込まれたも只では無く、無事に歸つて来る事も、

この私には解つて居る。その理由は今云はいても、後

にきつと解るのぢや。」

と、別に云つても聞かさない。

その中に渡船は着いた。乗合の客は皆上つた。けれ

ども直ぐには行つてしまはない。

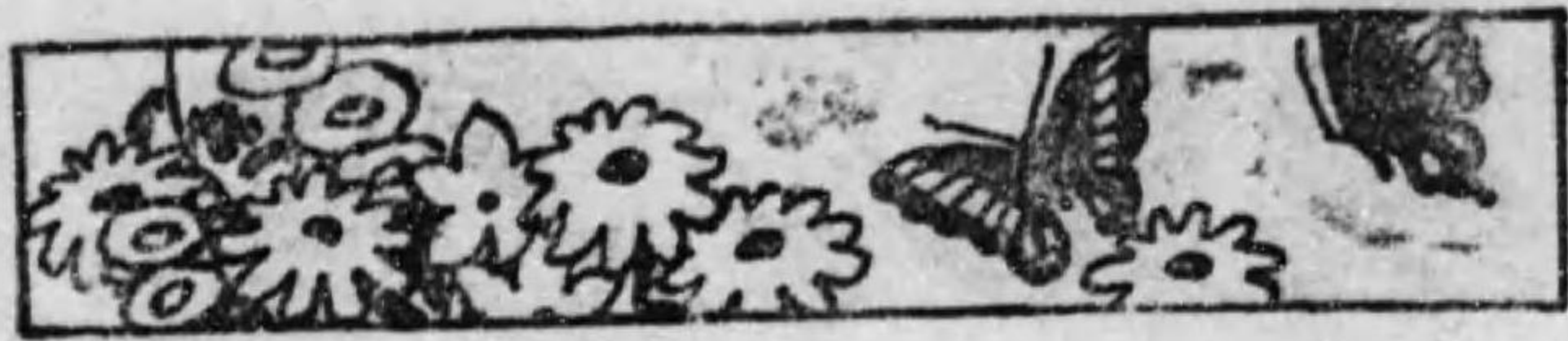
何れも白念の行方を案じて、心配半分、好事半分、



二二六
その棧橋に立止つたまし、川の方をまだ眺めて居たが、何時まで経つても小僧の姿は、何所からも浮いて来ないので、さてはやつぱり川の主の、餌食になつてしまつたのだらう、可哀さうな事をしたと、こんな噂をしながら、思ひくに行つてしまつた。

けれども老僧許りは、まだ其所に立つて居るので、船頭は氣の毒さうに、

『お前さんも大切のお弟子を、ひよんな事で失してしまつて、さぞお力落してせう。今に死骸があがつたら、その時知らせてあげますから、宿へ行つてお待ちなさ



い。私はこれから村の者に知らせて、手分をして小僧さんの、死骸を探し出す事にしますから。』
こ、親切に云ひはしたが、老僧は頭を振つて、

『いや、それには及びません。そんなに案じて下さらんでも、白念は無事に歸つて参りますちや。然し何分、川の中の事、様子を聞かうにも、便りが無いで困るが、なんと船頭さん、一つ私に釣竿を一本貸してくださらんか。』

『ナニ釣竿を。そりやアおやすい御用ですが、和尙さまが釣竿は、あまり見當ちがひちやありませんか。』



「いゝや、宗旨はちがつても決して見當はちがはんつ
もり。殺生の爲ではない、少し理由があるのぢやから、
是非一本貸してくれ。」

「そんなら丁度此船に、閑な時にやらうと思つて、一
本用意がしてあります、それを貸してあげませう。だ
が餌がまだありませんよ。」

「云ひながら船頭は、船の底にしまつてあつた釣竿を
出して、老僧に渡すと、

「いゝや、餌は何も入らん、只かうすればよいのぢや。」
「その釣を口にあてゝ、ハーツミ一つ息をかけて、そ

のまま水の中へ入れた。

船頭は不思議に思つて、ちつとそれを見て居ると、





間もなく浮標がビクビクと動いた。それと云つて引きあげると、鉤にかゝつて一尾の鮒が忽ち老僧の手に落ちた。

老僧は竿をすて、鮒を掌にのせて何か一言かけたと思ふと、こは如何に、その鮒は忽ち小さな人間になつたが、但し以前の小僧でもなかつた。

下

鮒の化けた小人は、老僧の前に畏まつた。老僧はニツコリ笑ひながら、



「どうぢや小魚！ 白念の音信を聞いたか。」と聞くと、小人は一つうなづいて、

「イヤ、音信どころでは御座りません、御傳言まで承つて参りました。」

「オ、それは重畳ぢや。して、白念は何所に居るな？」

「この川の主の腹の中に居らつしやいます。」

「ナニ、川の主の腹の中、されば先刻のあの大鯉にやはり吞まれたものと見えるな。」

「吞まれたと申すより、御自分で乗り込んだと云ふ方が可いでせう。然し流石は白念さんです。乗込むには



乗込む様に、ちやんと御用意がしてありました。」

「ハテ、それは何云

ふ用意か。」

「バクリと明けた鯉

の口へ、杖

を立て、お

置きになつ

たんです。

ですから鯉

は咬まうとしても、願に突支



棒があるので、歯がまるで合

はない許りか、咽喉から腹の

中まで見え透いてるんです。

ですから白念さんは、何の怪

我もなさらないで、鯉の腹の

奥の方まで、大手を振つて入

らつしやいしましたが、私の様な小魚は、二三尾づつ

緒になつて後からついて泳ぎ込んでも、樂に通れた位

でした。」

かう云つて話すと、老僧は横手を拍つて、





「なるほごそれで臍に落ちた。先刻白念の飛び込む時、私の杖を貸してくれと云ふたが、何にするのかと思ふたら、さう云ふ事に使つたのか、イヤ、感心々々！」と喜んで居る。

鮒の小人はまた云ふには、

「それで御傳言で御座いますが、私共が面白がつて、同じ腹の中まで参りますと、白念さんの仰有るには、イヤ、小鮒共よく来たな。一體私等の渡舟に乗るのを、鯉仲間知らせたのは、お前達の親父の鮒だが、かうした事にならうとは、私は初めから知つて居たから、



何も決して恨みません。その代り私の使になつて、一つお師匠さんへお傳言をしてくれ、と云ふのは他でもない、白念は無事に居ります、即ち鯉の腹の中で、鯉の魂を入れかへて居ります、この仕事さへ済みますれば、直きに歸つて参りますから、何卒御安心下さいませ。然しこんな小魚の分際で、そのお傳言をしやうにも、何うしてよいかわかりませんと、それを又伺ひましたら、それには、先刻の渡船場まで行つて、御師匠様の釣をなさるのをまつて、一番先に釣に咬ひつけ。さうすればお



師匠様の法力で、直ぐに人間にして下さるから、私の口上を云ふ事が出来るさ、何かから何まで教へてくたさいました。こんな嬉しい事はありません。』

さ、嬉しがつて雀躍りするさ、そのまゝ元の鮎になつて、ピンと跳た勢ひに、川の中へさ入つてしまつた。

側で呆れて見て居た船頭は、此時夢のさめた様に、はじめて老僧にむかつて、

「さうも不思議で御座いますな。』

さ、舌を捲いて感心して居る。

老僧はまた川の中を、ちつと見込んで居る様子だつ



だが、やがて船頭を手招きして、

「それくあれを見い、あれを見い。白念坊が鯉の魂を今入れかへて居る所ぢや。』

と云ふ。

船頭は面白がつて、指された所をちつと見たが、これにはまだ何も見えない、

「ドレ、何所にて御座います。』

「ソレ、其所に、あれが見えんか。』

「見えるのは渦のまいて居る許り、他には一向何も見えません。』



「なるほどお前には、まだ法眼が開いてなかつたな。」
 「法眼とは何で御座います。」
 「法の力を見わける眼ぢや。サア來なさい、開けてや
 らう。」

と、船頭に顔を出させ、まづ初めには眼を閉ぢさせ、
 それに三度ほど手をかざして、フツと息を吐きかける
 と、船頭に直ぐ眼をあけたが、今度はまるで別人の様に、
 川の中が有り／＼と見えた。
 見える許りかその底で、物云ふ聲までよく聞える。
 で、その有様は、――まづ一段高い所に、白念が立つ



て居ると、その前には大
 きな鯉が、まるで死んだ
 様になつて横になつて居
 るのを、大勢の小さな鯉
 が、四方から取巻いて泣
 いて居る。

白念はそれを宥めながら、
 「イヤ、皆決して哭くには及
 ばん。この大鯉は死んだので
 はない。今しばらく魂が無い





のぢや。それは古いのと新しいのと、今入れかはる所
 なのぢや。ソレ見て居れ！ 今新しいのを入れてやる
 ぞ。」

と、白念は以前の杖で、鯉の口をまた開かせ、その中
 を覗きながら、カツと一聲叱る様に云ふと、鯉は忽ち
 尾鰭を振はして、勢よく跳ねおきた。

が、今度は白念を吞まうとはせず、却つて小鯉共に
 向つて、

「皆の衆さがれ〜！ この川を掻い掘るのは、私等
 の水を取りあげるのでは無うて、更に川を深くして、



水を澤山にしてくれる爲めぢや。されば人間に禮こそ
 云へ、恨に思ふ事はない。殊にその掻掘の間は、別に
 堰を作つてくれて、それへ私等を入れてくれるさうぢ
 や。何も案じる事はないぞ。」

大聲で云ひ聞かして居る。

白念はまたその後から、
 「今もこの鯉の云ふ通り、川を掻掘るのは底を深くし
 て、洪水の起らぬ様にするのぢや。お前達を窘めて、
 皆生捕にしやうと云ふではない。その道理が解つたら、
 私はまた村の者に、よくお前達の事を云ふて、無益の



殺生するではないぞと、よく云ひ聞かせておくとしやう。

と云ふと、鯉共は口をそろへて、

「それは何分お願申します。」

「ではもう行くぞよ。さらば〜！」

云ふかと思ふと又渦が起つて、小鯉共を皆捲き込ん

だが、白念許りは浮き上つて、例の杖を持つたまま、

川の表へ現はれた時は、大鯉の背に乗つて居た。

「オ、白念か！」

「お師匠様！」



老僧は白念を抱きあげると、大鯉はそのまゝ沈んで行つたが、再び波間に顔を出した時は、バツと開けたその口から、見事に入れかはつた魂が、船頭の目にも見えるのであつた。

團扇車

一

姉の銀子はこの夏の初、螢狩に行くと言つて、團扇を持つて家を出たまゝ、たうさう今に歸つて來ない。足をふみ外づして水へ落ちたかこ、川筋を隈なく探しだが、その姿さへ見付からなかつた。

一緒に出た友達に聞いて見ても、皆螢を追ふのに夢中になつて居たのこ、深い闇夜であつたのとて、銀子が何所で何様な事して居たのか、また何所へ何う行つ



てしまつたのだから誰も知つて居るものはないのである。けれどそれもそれ切り歸つて來ず、又何所に居るとも知れないので、事によつたら昔の人の云ふ、神隠しにでもあつたのか、それとも人攫ひにかゝつたのか、何にしても不思議でならないので、家の者は賣卜者へ行つて、念の爲めに聞いて見ると、其所では別に心配さうな顔もせず、

「左様！なるほど姿を見せないに相違無いが、命は決してなくなつては居ない。」と云ふ。



「それなら今に歸へるのですか？」
と聞くと、一寸首を傾けて、

「さればさ、それは残つて居る者の、心次第で會ひにも来る、また會ひに行かれもする。」
と、解つた様な解らない事を云ふ。家の者はいよく迷ふ許りだ。

けれど妹の小夜子は、この事を聞くと急に元氣づいた。——残つて居る者の心次第？ それは私の事を云ふ相違無い。なるほど私は、根が我儘だもんだから、今まで随分姉さんごも、喧嘩や争論をした事がある。



る。ほんたうに腹の立つた時は、いつそ何所かへ行つてくれれば可いなどと、憎らしくも思つた事があるが、今かうして居なくなつて、而もその行方まで知れなくなつて見ると、さてまた急に懐しくもあり、また一時でもそんなに思つたのが、いかにも勿體ない、すまない、それが氣になつて、毎日それ許り心配して居た。——ほんとに、若しあれぎりに、此世に歸つて来ないものとするれば、自分だつてもう生きて居られない位に思つて居た。

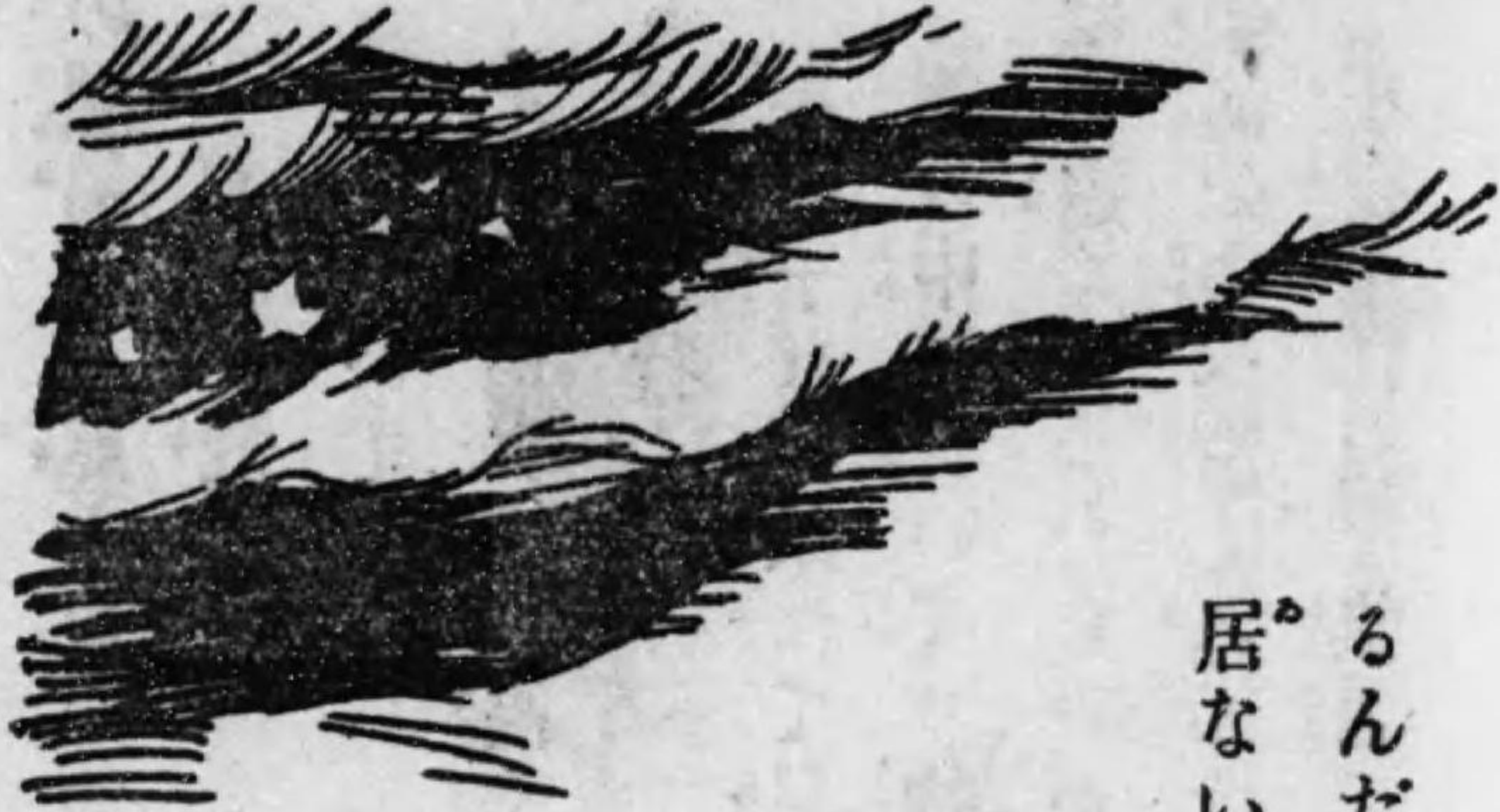
所へかうした話を聞いて、此方の心次第によつては、



二三八
會ひにも來、會ひにも行けると云ふ。して見れば死んで居ないご云ふ事丈でも、もう確かだと思つたから、それで元氣が出たのであつた。
で、もうこれからは何様な事があつても、姉さんと喧嘩なんぞ決してしない。さうして今度會つたらば、まづ何よりも今までの、自分の悪かつたのをあやまつて、これからは何でも云ふ事を聞いて、妹らしく温順しくして居ようと、かう心を入かへたら、きつと會へるに相違無いご、かうもまた思つて居た。
で、ある晩の事だ。それは風の無い、いやに蒸し暑



い晩であつたが、小夜子は庭の涼臺へ出て、ひこり涼んで居るご、又しても姉の事を思ひ出す。
深い紺色に晴れた空には、金銀の砂子をまいた様な星が、一面にきらめいて居る上に、薄い牛乳を流した様な銀河は、天の端から端へご横はつて居る。
ご、やがてその星の一つが、長い尾を曳いて斜めに飛んだ。
「アラ星が……」
と、思はず口走つた小夜子は、その飛んだ星を、そのまゝ螢の様にも見た、するとやがて螢狩に行つた、姉



るんだよ。……けごももう螢なんぞは
 居ないから聞かうたつて聞かれやしな
 い。』
 心細さうに呟くご、だしぬけに
 眼の前へ、フハリと青い光り物
 が浮んだ。
 驚いて立ち上る時、今まで持
 つて居た團扇を、思はずバタリ
 と地に落したので、それを又拾
 はうとする、これはしたりそ



の事がまた思ひ出され
 た。

「ア、ほん
 とに姉さんは
 何所へ行つたんだら
 う？
 螢に聞いたらきつと解



二四二
の團扇が、風もないのに又地から舞ひ上つて、フハリ
くと宙を飛んで、その光り物の後から、さながら追
ふ様について行く。
光り物が次第に高くあがるに、團扇も同じ様に舞ひ
あがつて行く。

小夜子は只呆れて見て居る許り。
その中に青い光り物も、自分の持つて居た團扇もよ
ほご遠く行つたものか、段々小さくなつて行つて果は
銀河の中へ消え込んでしまつた。
小夜子はたゞ無言で見つめて居た。が、その次に現



はれた物に對し
ては、又聲を立
てずに居られな
かつた。

それはそ
の銀河の中
から、不思
議な姿が現
はれたからである。まるで
天人の様な可愛い少女が、





綺麗な車に乗つて来る。

「まア……………何だらう？」

と、見つめて居るご、その車は見る／＼中に、自分の前まで来て止まつた。

そしてその上の少女は、ヒラリと下りるご直ぐ小夜子の前へ来て、

「お姉様のお待ち兼ね。直ぐに入らしつて下ださいまし……………」

ご 迎へに來た様子である。

「ナニお姉様が……………？ そ、それぢや何所に居らつ



しやるの？」

「何所とお尋ね遊ばす間に、入らつしやれば解ります。」

「ぢやア何うして行くの？」

「これへお召し下さい。」

ご、少女ははや小夜子の手を取つて、自分の乗つて來た車へと乗せた。

その時はじめて気がつくご、これは只の車ではない、立派に見えたその車の輪は、皆團扇で出來て居る。けれどもその速い事は、まるで飛行機にでも乗つた様に、空を切つて走つて行く。



この時また正面を見ると、先刻はまるで無かつた月が、遙か正面に眞圓く見える。そして車が走れば走るほど、その月が段々大きくなつて、遂には此方の目に入らない位に、大きくく成つたと思ふと、今度は前方が車と一緒に、その月の中へ呑み込まれてしまつた。と、思ふとまた正面に銀色の廣い池が見えて来たが、小夜子の乗つた團扇車は、尙も前へ進んで行つて、たうとうその池の中へ、ザンブと許り飛び込んだ。アツと思ふと小夜子は思はず目を潰つたが、もう一度目をあけた時には立派な御殿の前に来て居た。



小夜子は夢に夢見る様だ、
「まア私……此所何所でせう？」
と、あたりを見まはすと、
何所からか聞馴れた聲で、
「小夜ちゃん！ よく来て
ねエ。」
と、云ふのは正しく姉である。
「まア姉さま！ 姉さま！」
「思はず叫んで走りよらうとす





るのに、さてその居所が解らない。

二四八

二

現在聲を聞かせながら、まだ姿を見せてくれない、その懐かしい姉の銀子が、今はまた恨めしくもなつた。「姉さま！何處なのよう。はやく出て来てちやうだいな！顔をを見せてちやうだいな！」焦思氣味に促がすと、先方はさも氣のない様子で、「まだ私出て行かれないの。顔を見せる事出来ないの。」と云ふ。が、その聲はつい鼻の先に聞える。



小夜子はいよくもごかしい。

「アレ、直ぐ傍に居るんぢやないの。ごうしてそれが出て来られないの。顔見せる事出来ないの？」
「だって、私出て行くこあなたがもう出られなくなるから、私顔を見せるこ、其方の顔が見られなくなるから。」

こ、答はいかにも情無さうだ。

小夜子はまだ腑に落ちない。

「ア、何うして？ をかしいぢやありませんか。先刻迎ひに来た方は、お姉様がお待ち兼ねだつて云つてよ。」

二四九



だから急いで連れて来てもらつたのに、何うして會つてくれないの？」

云はれて姉は、さも當惑した體で、

「えい、それは私待つて居たわ。だから私嬉しいワ。こんなに早く来てくれて。」

「そんなら何故會へないの。」

「私の方ちやア會つてるのよ。ちやんご小夜ちゃんの顔見てるのよ。けごも其方には見せられないの。それは仕方が無いから、我慢してちやうだい。」

「まア、何故仕方が無いんでせう？其許許り解つてた



つて、此方に見えなきやなんにも成らないワ。」

小夜子は不平に耐へられない、せめては手でも解つて見たいと、其邊を探りまはつたが、何も手に當らない。

「アラ姉さま、何うなすつたのよう。其方で見えて居るんなら、何故手でも握つて下ださらないの？」

と、果は泣く様に口説き立てると、姉の聲もまた曇つて、

「だつてそれは仕方がないワ。小夜ちゃんの居る所と、私の居る所とは世界がまるでちがふんですもの。」



「ナニちがふもんですか。私ちやんと覚えてるわ。大きな銀色のお池の中の、おんなじ御殿の中ちやありませんか。」

と、云ひながら念の爲めに、自分の四邊を見まはしたが、先刻來た時の様子と、少しも變つた所が無い。

「ですからまア、そんなにちらさずに、はやく會つてちやうだいよ。顔を見せてちやうだいよ。」

と、又しても兩手で空をさぐつた。するとその手に觸れるものがある。急いでつかんでよく見ると、今までは少しも目に入らなかつた、——先



刻から行方の解らなかつた、——宵に持つて居た自分の團扇が、不意に我手に歸つて來た。

「まア、この團扇！」

と、云ひながらよく見ると、その表にありありと、文字が書いてあるではないか。而もそれが見覺のある、姉の銀子の筆蹟で、

「今夜はよく會ひに來ておくれであつた。その御禮にはこの團扇を、また元の通り返へしてあげる。その代りこれを持って、此所はおとなしく歸つておくれ。さうして今度はお前の方から、私を迎ひに來ておくれ！」



その時こそは二人が、ほんとに手を取つて會へるだらう。まづそれまでは、ごきげんよう。」

と、口で云ふ通りが書いてあるでないか。

「アア、こんな事……ちやア何うしても會つて下ださらないの。」

と、問ひ返へしてももう返事はなく、却つて呼ばない以前の少女が、前と同じ車を持つて來て、

「ハイ、お歸りで御座いますか。」

と、頼みもしない迎ひに來た。

小夜子は急に悲しくなつて、



「私もう行かなきゃならないの。ちやア何の爲めにこんな所へ來たんでせう？」

「それは、お姉様がお呼びになつたんです。」

「姉さま呼んで下だすつたつて、自分許り會つといて、私にや會はして下ださらないんですもの。」

と、いかにも不足らしく云ふと、少女はそれを慰めて、

「いゝえ、それは仕方が御座いませんよ。此所は上界、貴女の居らつしやる所は下界と云つて天と地にわかれてるのですもの。」

「まア、それちやア此所は天なのですか。」



「天も月の世界です」
 「まよ」
 ア、そんな
 所へまアよく來ら
 れましたねえ。」





二五八
「それはお姉様か居らつしやるから、お姉様の一心を、月の女神様も御不憫に思召して、それでわざわざお會はせなすつたんです。」

「まア………それちやア姉様は、この月の世界へ来て、まだ生きて居らつしやるんですネ。」

「それは生きて居らつしやいますとも。此所に居らつしやいますからには、何時までもお死になる事は御座いません。」

「それちやア姉さまはお死になつたんぢやないんですネ。此間螢狩に入らしつたきり、何時まで経つてもお



歸りが無いから、きつともうお死になつた事と、一同あきらめて居たんですの………此所に生きて居らつしやるんなら、こんな嬉しい事はありませんワ。けごも、折角生きてらつしやるのに、側まで来て居て會へない様ぢやア、やつぱりなんにも成りやしないワ。」

と、又悲しさうに考へ込む。

少女は傍から宥めながら、
「けれどもそれは時節です、時節さへ来れば、屹度會へる様になるんですから、今夜は無事にお歸り遊ばせ。さうでないとお家の方が、お姉様とおなじ様にお成り



ではないかと、又御心配なさいますよ。』

『私……いつそ姉さまの様になり度かつた。』

『アレ、何を仰有るんです。お姉様の此所に居らつしやるのには、別に理由があるんですから、さう思ふ様は参りません。』

『ナニ、別に理由があるんですツて？』と、小夜子は又それが聞き度さに、容易に立たうともしない。

三

『兎も角もこれにお乗り遊ばせ！お話はその上でゆる



く致しませう。』

と、少女達は小夜子をたすけて、とう／＼車に乗せてしまふと、もう團扇はまはりはじめて、小夜子は月の宮を離れた。

『アラ、何うしませう？もう一度姉さまに？』

と伸びあがつて後をふりむくと、少女の一人はそれを支へて、

『アレおあぶない。何うなさるんです。落ちたら大變ぢや御座いせんか。それよりも只今の理由、貴女はお聞きにならないので御座いますか？』



二六二
かう云ふので、小夜子も餘儀無く座にかへつて、
「それも然うねエ。ちやアはやく話してちやうだい。
一體何うして姉さまは、あんな所に居らしやるの？」
「それは螢をお取りになつたからです。」
「アラ、螢なら誰だつて取るぢやないの。私だつてず
ゐぶん取つたワ。」
「所がそれが、只の螢ぢやないので御座います。月の
女神様の大切にいらしつた頸輪の玉が一つこばれ
て、螢にまちつて飛んだのを、お姉様がお取りになつ
たんです。」



「それぢやアその頸輪の玉を、お返し申せば可いぢや
ありませんか。」
「それがまだ皆返つて居らんので御座います。一體そ
の玉は、青いのと赤いのご、それから黄色いのごあつ
たのですが、お姉様のお取りになつたのは、もとく
螢とおまぢがへになつたんですから、その中の青いの
計りなんです。」
「すると、後の二つは？」
「まだ落ちたまゝになつて居りますが、それが皆揃へな
い中は、お姉さまにはお許が出ないので、何所へも行



二六四
かずに夜になると、その玉探しに遣られて居らつしや
るんです。で、その玉が皆揃ひさへすれば、貴女にも
お會ひになれる計りか、きつと御褒美もいただけて、
御一所にお歸りになる事も出来るんで御座います。で
すからそれを樂しみに、せめてはその玉の早く見付か
る様に、お祈り遊ばすのが可いちや御座いませんか。』
かう云はれると小夜子は、一寸考へ込んで居たが、
『ちやアその玉を、私も一所に探しませう。姉さまの
御手傳して、四つの目で探したら、早く見付かる譯ち
やありませんか。』



『それはさう云ふ道理ですが、後の玉は紅と黄色で螢
の様ぢやありませんから、急には見つかりませうまいよ。』
『でも、見當さへついてれば、一生懸命に探しますワ。
一體何處に落ちたんでせう?』
『さア……それは私達には解りませんワ。』
さ、少女は一寸當惑してしまつた。
その中に團扇車は、何時か天の河の邊まで來た。見
るとその河原には、金の砂と、銀の砂とが、目眩い計
りに光つて居る。するさ小夜子は聲をあげて、
『待つて下さい！まつて下さい！此所になんだかあり』



さうよ。」

と云ふ。少女は急いで手を振つて、

「いけません。こんな所にあるもので御座いますか。」

「でも黄色いのがあんなに澤山、屹度あんなにある事よ。」

と、何うしても聞入れないが、少女もまた頭を振つて、

「それでもこゝは天の河原で、星の女神様の御領分ですから、うつかり降りる事は出来ないんで御座います。」

「そんならその星の女神様に、お願いして下さいいな、

一寸探し物を致しますから、しばらく河原を歩かして下さい下さい。」

「ごうも困りましたねエ。そんなに仰有いますのなら、一つお願い申して見ませうか。」

と、餘儀無く少女は車を停めた。

車が停まると待ちかねてゐた小夜子は、直ぐに下へ降りようとする。

「アレお待ち遊ばせ！私が行つてお願い申して、ちやんと御許の出るまでは、此所をお動きになつちやいけません。」





と、少女は小夜子を強ひて止めて、自分丈車を降りると、そのまゝ天の河を渡つて行つた。

が、河幅がかなり広いので、それを渡りきつた頃は、もう後姿も見えない位だ。

はやく歸つて来てくれれば可いのに、小夜子は待ちわびて居る間も、車の上から頸を伸ばして、しきりに河原を眺めて居る。

河原には砂が一面、それが金色や銀色に光るが、氣のせいとその間から、時々黄色いのが見える様だ。

と思ふこそその玉が、姉の探して居る物に、相違無い



様にも思はれて、黙つて見ては居られなくなつた。と
う／＼小夜子は怵へかねて、獨り車から降りようとしたが、先刻の少女の云ふ事もあるので、また少しく遠巡つて居るこ、やがて其所へ一人の婆が、箒木を持つてやつて来て、車の上の小夜子を見ると、不思議さうに立ち止まつた。

「一體貴女は何して居るんです？」
と、聞く。

「私……今少し用があつて来たんですが……ちよつと人を待つて居るんです。」

「そんなら仕方ありませんが、こんな所に車があつ

二七〇



ちや、邪魔でお掃除が出来ませんネ。もつと其方へよ
けて下さい！」

「それは済みませんネ。けども私、一人ちや何うする
事も出来ませんから、同伴の歸るまで待つて下さい
な！」

「そんな者待つちや居られません。一人で出来なけり
ア私がしてあげます。」

かう云ふのもう婆さんは、簀木を其所に置いて車に
手をかけ、ウン／＼云つて押しはじめたが、見かけに
よらない力があるこ見えて、譯無く河原の端まで持つ

二七一





て来てしまった。



中から、一本取って使はうとする、ちやんと数の揃
 つて居たのが、急に狂つたからたまらない、車は忽ち
 中心を失つて、片方に傾いたその弾みに、小夜子は河
 原へ轉げ落さされた。

「ヤレ〜とんだ骨を折ら
 された。オ、あついく。
 だが丁度好い物がある、こ
 れを一つ借ませう。」

さ、輪にしてあつた團扇の



所へ少女は歸つて
 来たが、此體を見る
 と驚いて、
 『アレ小夜子さま、
 何うなすつたんで
 す、まだお許の出な
 い中に、河原へ降り
 ちや大變ちや御座い
 ませんか。星の世界
 の者でない者が、う





二七四
 つかりこの河原へ降りると、直ぐ洪水が出るんで御座
 いますよ。困った事をなさいましたねエ。』
 と、小夜子を抱き起しながらも、心配さうに後をふり
 むくとはや彼方の川の方に、白いものが高く見えた。
 それは正しく浪らしい。

しびれ橋

上

氣の強い春子は、足はあまり強くありませんでした。
 今日も友達に誘はれて、山手へ遠足に出たのですが、
 友達は皆達者なのに、自分は思ふ様に歩けないもので
 すから、何時の間にかはぐれてしまつて、歸りには一
 人ぼつちになりました。

けれども少しも驚かず、麓の路を急いで來ますと、
 やがて大きな藪の所へ來ましたが、丁度其所に小流れ





があつて、小さな橋がかゝつて居ますから、何気なく渡らうとしますと、だしぬけに藪の中から

「まつたー」

と呼ぶ聲がします。

春子はふりむきました、誰も居る様子はありませんで、また渡らうとしますと、同じ様にまつたご云ひます。

春子は氣味が悪くなつて、

「誰？」

ご、云ひながらふり向きまますご、藪の中がカサ／＼と



鳴つて、一羽の兎が飛び出して、春子の前へ來るご、前足を行儀よくあげて、犬のチン／＼の様な眞似をしました。

春子は一寸驚きましたが、相手が可愛い兎ですから、別に恐くもありません。

「今呼んだのは、お前なの？」

と聞きますと、兎は大きな耳を垂れて、

「呼んだのは私ぢやありませんが、御用のあるのは私です。」

と云ひます。



「それより前に春子さんー一つこ
つて、
直ぐまた元の所へ歸
上へ乗つたと思ふと、
橋の
ヨンジ一つ跳ねて、
と、また尋ねますと、
「一體何うしたと云ふの？」
が、
「また尋ねますと、
「それより前に春子さんー一つこ
つて、
直ぐまた元の所へ歸
上へ乗つたと思ふと、
橋の
ヨンジ一つ跳ねて、
と、また尋ねますと、
「一體何うしたと云ふの？」
が、
「また尋ねますと、



の爲にふりむきますと、なるほど簀の奥に、何やら光
る物がありますから、春子は思はず後へ退がりました
が、

「簀
の神様？……」
と、春子は念



「何だつて……それぢやア誰が呼んだの？」
「簀の神様が呼んだのです。」



の橋を渡つて見て下さい！」
ご云ひます。

春子は妙な事だと思ひながら、無造作に進んで行つて、その橋に一ト足かけました。

すると急に身體中が、ビリ／＼と慄へて来て、それきり前へは出られませんか、驚いてまた身を退きました。

「まア驚いた。變な橋ねエ。」

と、云びますと、兎はうなづいて、

「變な橋の筈です。それは只の橋ぢやありません。魔



物のかけて居る橋です。」

「魔物の橋？」

と、春子はまた眼を圓くしました。

「お驚きなさるのは御道理です。實はこの橋になつてゐるのは、この先の池の主なんです。この藪が段々茂つて、池の影になるものですから、ごうかしてこの藪を、人に刈らしてしまはうと思つたのでそれでわざとこんな所へ、橋に化けて來たんです。」

「そんな事して何の役に立つの？」

「かうして橋に化けて居て、上を渡る人の身體を痺れ



二八二
させれば、皆驚いて此橋に、化物が出ると思ふでせう。さうするご又人が、その化物は遠くには居まい、きつと此藪の中に相違無いと云ふので、其處で大勢やつて来て、化物退治をするために、藪の竹を刈り取つちまふだらうと、こんな事を考へてるんです。』

「まア……」

春子は呆れて橋を見直しましたが、橋は只の土橋の通りで、少しも變つた所が見えません。

鬼はまた云ひました。

「所が若しその通り、この藪を刈られてしまへば、さ



しづめ私の居所が無くなります。それ斗りかこの藪には、聲の好い鶯も居れば、羽根の綺麗な雉子も棲んでるのですが、それがみんな宿無しになつて、どれ程難儀するか知れません。ですから何卒春子さん！ これからお家へお歸りになつたら、直ぐこの事をお家の方に話して、橋の不思議は藪の化物の所爲ではない、池の主の悪戯だと云ふ事を、よく皆さんに知らして下さい！』

「オ、頼みと云ふのはその事なの。エー、よく解つたから、私歸つて話してあげるわ。けれどこんなな



身體が痺れちやア、私渡る事が出来ないぢやないの。さうしてこの橋が渡れなけりやア、お家へ歸る事も出来ないぢやないの。」

「それは御心配にや及びません。私が負つてあげませう。さアこの背へ入らつしやい！」
と、云ふかと思ふと小さな兎は、忽ち大人ほど大きくなつて、春子に背をむけましたから、春子は直ぐにおぶさりますと、さも軽々と跳ねあがつて、橋を飛び越してしまひましたが、渡つてしまふと春子の體は、再び地の上に立つて居て、橋はもう後になりそして今迄



の兎の姿は、もう見えなくなつてしまひました。不思議な事もあるものだ、と思ひながら、春子はそのまゝ又歩き出しますと、やがて藪の所をはなれて、今度は池の側へ出ました。
するごまただしぬけに、池の中から蛙が一匹、春子の前へ飛び出しましたが、見る／＼人間の様に大手をひろげて、前をさほせんぼしてしまひました。
春子は吃驚しながら、
「アラ、何するの？」
と云ひますと、蛙は急に又兩手をついて、



「少しお待ち下ださいまし。お話し
なければならぬ事がある
ります。」

と云ひます。

春子はまだ黙

つて居りますと

その顔をちつと

見て、

「お嬢さんはたつた今、
麩の魔物に會つてらつしやいました



ね。」

と云ひます。

「いゝえ、魔物になんぞ會やしないよ。兎には一匹會

つたけども……」

と、皆まで聞かず引こつて、

「さア、その兎が魔物なんです。麩の魔物の化けたん

です。」

「それよりは池の主が橋に化けて居たのは、見たよ。」

「いえ、その橋もやつぱりその、麩の魔物の化け

たんです。」



春子は譯が解らなくなりました。
蛙はさも心得顔に、

二八八

「まだ御不審は晴れますまいが……その橋を渡る者は、
吃度身體が痺れてしまひます。それは藪の中の魔物が、
さうして人を驚かして、人を通さない様にするのです。」
「何だつて又そんな事するの？」
「それはこの池の方へ人を來させない爲めなんです。
この池には昔から稀代な寶物があるんですが、それを
藪の魔物めが、疾うから欲しくてたまらないので、か
うして人に知らせない様にして、自分が横奪しやうと



云ふんです。その證據には御覽なさい、池の水があつた
通りです。」

ご、後を向いて指した所を見ますご、なるほど寶物
でもある様に、水が金色に光つて見えました。

春子はちつと見てゐましたが、今この蛙の云ふ事ご、
先刻の兎に聞いた事ごは、まるで同じ様ですから、何
方を信用してよいのか解りません。

けれども蛙の云ふ通り、池の中には寶があると見え
て、確かに金色に光つて居ますから、さてはやはり前の
兎がほんこの藪の魔物なので、わざと先を越してあんな

二八九



な事云つて、私を誑したのだなと思ひました。

「道理で自分の渡る時は、橋は何とも無かつたワ。」

「兎が負つて渡つたんですネ。」

「ア、然うなの。」

「その時耳を擱んでやりやア、直ぐに正體を現はしましたのに。」

と、蛙はさも残念さうに云ひます。

中

何だかちつとも解らなくなつてしまひました。先の



兎の云ふ事を聞けば、橋の正體は池の魔物だ云ひますし、今の蛙の話によれば、橋はその兎が化けたのだ云ひます。

が、春子は、この蛙が大きな口をして、明けるさ腹の中まで見える位なのに、まさか嘘をつくまいと、此方の方を信じてしまひました。

「ほんごにそれは残念な事でしたねエ。ちやアもう一度引返して、兎の耳を引つかんで、正體を見現はしてやらうか。」

と、氣の強い子だけに、元の道を歸へらうとしました



二九二
が、例の足は弱つて居るので、また少しためらひま
した。

それと見て取つたか蛙は、前足を手の様にふりなが
ら、

「イヤ、それはもう駄目です、貴嬢が正體を知つたと
見たら、うつかり姿は見せやしません。」

「でも知らぬ顔して行けばいいだらう。」

「それがもう駄目なんです。彼奴は耳が長うございま
すから、此所でこんなお話をしてるのを、ちやんと皆
聞いてるんです。」

「まア……恐ろしい耳ねエ。」

「だからもうあんな奴にやア關はず、それより私が御
案内しますから、池の御殿へ入らつしやいまし。寶物
を御覽に入れます。さうして御氣に入つたのが御座い
ましたら、一つは貴嬢にさしあげる様に、池の主にも
申しませう。」

「まア、それは氣の毒だねエ。」

「なんの氣の毒な事が御座いますものか。これからは
またお池の爲めに、いろ／＼御願する事が御座います
から、それ位なお禮は當然で御座います。さア何卒か





う入らつしやいまして！」
と、今度は後足で立ちあがつて、春子を連れて行かうとします。

春子は何気なくついて行かうとしますと、又しても後の方で、何やら云ふ聲が聞えますから、ふりかへつて見ますと、遙か後の藪の蔭から、先刻の兎が首を出して、前足をあげてふりながら、何やら云つて居る様ですが、兎は前足が大變短く、それに口が縦にも裂けて居るので、振つてるのもよく解らなければ、云つてる言葉もよく聞えませんが。





二九六
 此時蛙は池の方をむいて居ましたが、一體目玉は頭の端について居るので、かうして後足で立つて居ると、却つて後の方がよく見えまますから、はやくもこの様子を見るこ、いそいで春子の手を取つて、
 「いけませんく、あんな奴の相手になつてると、また酷い目に會ひますよ。」
 こ、無理に引立てる様にして、急いで池の縁まで來ました。

此時見ると、池の中の金色の光は、ますく立派にかゞやいて、如何にも立派な寶物がありさうです。春



子はまたそれに見惚れて、早く其側へ行つて見たいと思ひましたが、何しろ先方は水の中ですから、何うして可いかと思つて居ますと、蛙はやがて脊を出して、
 「さアこの上にお乗んなさい。」
 と、云ひます。

「まアお前私がおぶへて？」
 「大丈夫、おぶへますとも。龍宮へ行くんだつて、亀の子におぶさるざやありませんか。こゝはお池の御殿ですもの、蛙の背はあたりまへです。」
 「さう、それぢやおぶさつてよ。落しちやアいやよ。」



と、春子は思ひきつて、蛙の背におぶさりました。先刻の橋を渡る時は、兔の背におぶさり。今度はまた蛙の背……なんぼ足が草臥れて居ると云つて、今日はよく物に負さる日だと、自分でも可笑く思ひながら、蛙の肩につかまりますと、

「しつかり掴まつてゐらつしやいよ。オツト、目玉をおさいちや困ります。……ソレ、飛び込みますよ。」と、云ふ中にドブンと音がしたと思ふと、もう池の中へ來たらしいのですが、その癖少しも水はかゝらず、何時の間にか自分の體は、大きな岩と岩の間の、黒い



門の前に立つて居ました。

春子はホツと息をつきながら、もう此所が池の御殿かと、今の蛙に聞かうとしますのに、何所へ行つたか姿が見えません。

と、やがて前の門が、左右にサツと開きまして、中から又ツと現はれたのは、鬼にしては角がありませんが、人間にしては恐ろしい顔の、どうしても魔物らしい奴で、春子を見るにニヤリと笑つて、

「嬢さん！ さうく穿にかゝつたネ。」と、云ひます。春子は初めて氣がつかしました。



「ナニ穿くに？……ちやアやつぱり誑だまされたの、まアいやだ。」

と、云いひながら、急いそいで引ひかへして逃げようごしますと、こは如何いかに、彼方ひかたには先刻さつこ来た所の景色けしきが見えながら、何なんだか前まへに門かどへるものがあつて、何どうしても前まへへ進すすめません。魔物まぶつは後うしろへ来てそれを見みながら、

「ハ、ハ、ハ、可哀あはれさうに、いくらそんなに悶搔いざいたつて、お前達まへたちの力ちからでその蓋たかが、容易やすにこわれてたまるもんかと、云いひます。

蓋たかと云いふなら閉ふがりさうなものを、その癖くせ彼方ひかたはよ





三〇二
く見えるのですから、春子は尙も進まうごしますと、急に全身がまた痺れて、其まゝ立縮んでしまひました。「それ見なさい！ 駄目な事だ。かうして魔力で張らせた氷は、鐵槌だつて破る事は出来んぞ。さア……往生して此方へ来るんだ。」と、此時はじめて手を取りに來ましたが、春子は一生懸命になつて、その手を拂つて退かうごします中に、何時かもう抱へられて、そのまゝ門の中へ連れ込まれました。途端に何所かでカツカツと、蛙の笑聲が聞えました。



三〇三
春子は悔しくてたまりません。が、今更何うにもなりませんか、度胸を据ゑて抱かれて行きますと、やがて薄暗い生濇い、そして變に臭い所へ來ました。流石の春子も氣味が悪くなつて來ましたが、わざと落付いた顔をして、四邊を見まはしますと、例の魔物は、
「なか／＼氣の強い娘だな。」
と云ひながら其所へおろして、
「さあ、あれを見ろ！」
と、前を指しましたから、春子はその方を見ますと、



何とも知れない圓い光る物が、高い所の兩方にあつて、その下に眞赤な洞穴の様なものがあります。

「此處何處なの？」

春子は平氣で聞きます。魔物はニヤリと笑ひながら、「大王様の御前だぞ。」

と云ひましたが、何處に大王様が居るかと思ふと、その眞赤な洞穴が、また急に見えなくなつて、代りに二つの圓い玉が、一層強く光り出しました。

下



種々な不思議を見せられるほど、却つて春子は度胸が据わりました。そして、何だか乙種の活動寫眞でも見た様に、結句面白くなつて來ました。

で、よく瞳を凝らして見ますと、その二の光る玉は、何だか眼玉の様に思へ、そしてその一の所に、大きく一文字に見えるのは、ウムと結んだ口らしく見えますから、さては今まで此所にあつた、眞赤な洞穴かと思つたのは、その口が明いて居たのだと解りました。

それにしても大きな口！ 大きな眼球だと思ひますよ、それが先刻途中であつた、蛙の顔にも似て居ます



ので、さては此池の主の大王と云ふのは、やはり蛙の仲間かと思ふと恐さも薄くなりましたから、春子はもう落着いたもので、

「もう一度口を明けて御覽！」

と、わざと擲掬つてやりました。するとその大王より側に居た魔物が驚きまして、

「や、此奴、何と云ふ。女の癖に大それた……そんな失禮な事を云ふと、大王様に吞まれてしまふぞ。」と云ひましたが春子は平氣なものです。

「吞まれるなら、早く吞まれて見たいワ、さうして大



王様のお腹へ入つて、腸の掃除でもしてあげませうよ。」
「生意氣な事ぬかすな。ソレ大玉様！ はやく吞んでおやり下さい。」

かう云ふと、一文字の口は、またバツと明きまして、以前の眞赤な洞穴になりましたが、その洞穴から出る風は人を吹き飛ばすのではなくて、却つて中へ吸ひ込むのでした。

けれども春子は、今よく見ておいた中に、その大きな口の邊には、やはり鼻の穴のあるのを、ちやんごよく見ておきましたから、手はやく頭のリボンを取つて、



細く紙捻の様にして、自分の吸ひ込まれる時、その鼻の穴へ投げ込みますと、此所でも息を吸つて居ましたから、リボンは譯無く入つて行きました。

ご、忽ち大王は、全身中をブル／＼と震はせて、ハハツクシヨーと斗りに、恐ろしく大きな噴鼻をしましたから、その弾みに春子もリボンも、忽ち中から吐き出してしまひました。

これには流石の春子も、一時氣を失つて居りましたが、漸く正氣付いて見ますと、自分は今吐き出された勢ひで、うまく池の中から出て、岸の芝の上に居まし

た。そしてリボンもその側に、ちやんと落ちて居りました。

『まあよかつた、蛙は口が大きいが、噴鼻もやはり大きいネ、折角私を呑んごきながら、直ぐ吐き出してしまつたよ。丁度リボンも出て居るから、又元の通り掛けさせよう。』

こんな獨語を云つて、リボンを髪に結びつけながら、ふと四邊を見ますと、同じ芝原の上に、見た事もない立派な寶物が、澤山落ちちつて居りますのに、また彼方の木の根の所には、先刻の魔物が推しつけられて眼





ばかりパチクリやつて居ります。

春子は立ちあがつて其所へ行つて、

「オイ魔物さん！ 何うしたの？」

こ、やさしく聞いてやりますと、魔物は先刻に引かへて、さも心細い聲になり、

「イヤ酷い目にあひました。お前さんが大王様の鼻の穴へあんな悪戯をなすつたもんですから、大王様の大嫌ひの、噴鼻をとう／＼遊ばして、折角大切の寶物を、腹のお藏へ納つてお直きになつたのみで、みんな吐き出しておしまひになりましたが、おかげにこの私まで、



こんな所へ吹き飛ばされて、すつかり目を舞はしてしまひました。」

こ、泣きさうになつて話します。

春子は可笑しさをこらへて、

「まあそれはお氣の毒だつたネ。そんなに大王は噴鼻が嫌ひ？」

「誰だつて好きなものはありますまいが、何しろ大王様はあの通り、大きな口をしてらつしやいますから、うつかり噴鼻をなさいますと、腹の中の物が皆飛び出してしまひます。ですから大のお嫌ひなんです。」



と、云ひながら又池の方を見て、

「あれ／＼、池の水があを通り、まだザブ／＼波立つて、しかも大層濁つてるのは、あれからまだお噴鼻が、容易に止まないものと見えます。もうかうなつては私は、うつかりお池へは歸れません。ア、何うしたら可いでせう。」

こ、さう／＼泣き出してしまひました。

春子は可哀さうになりましたから、尙もやさしい言葉をかけて、

「そんなに行き所が無いのなら、私が何所かへ連れて



つてあげやう。だが、そんな顔した魔物では、誰も厭がつてよせつけまいネ。」

「イエ、その御心配には及びません。私だつてお池に居て、大王様の家來で居りやこそ、こんな態をして居りますが、陸へあがれば、ほんさうの正體になつてしまひます。これをよく見てください！」

と、云ひながら一寸でんぐり返しを打つと、見る／＼中に今の魔物は、小さな田螺になつてしまひました。

「なるほどこれは面白い！ 田螺なら可愛いから、私の袂へ入れてあげやう。」



と、云ふのは一匹の
白兎でした。

「オ、
お前は
先刻の
兎さん
だ子。

ほんとにあの時
は有難う。だが、お前を疑つた斗り
で、私も酷い目に會ふ所だつたよ。」



と、云つて拾ひあげ

まして、そ
のまゝ袂へ
入れてやり
ました。

所へピヨ

ンくやつ

て来て、

「お嬢様！

おめで度う御座います。」





と云ひますと、

三二六

「ほんとにおあぶない所でした。ですから、私は心配して、後からお呼びしたんですが、何しろ私共はこの通り、口が縦にわれてますので、思ふ様に聲が立たず、自分の耳には聞えても、他へは少しも通じないので、ごんなに氣を揉みましたらう。けれどももう御安心です。あゝして池の魔王めを、酷い目にお會はせなさいましたからは、これに懲りて彼奴等も、二度と悪戯を致しますまい。それにこの通り寶物を、あり丈さらけ出してしまつたのは、みんな貴女にさし上げたんでせ



う。」

「まア。それは嬉しい子。けれどごもこんなに澤山あつちやア、ごても持つて行けないワ。」

「その御心配は御無用です。荷持はいくらも居りますから。」

と、云ひながら又跳ねあがつて、後の方をさしまねいたと思ふと、やはり以前の藪の方から、同じ様な白兎が、何匹も何匹も出て來まして、以前の白兎の前へ來るご、まるで體操でもする様に、後脚で行儀よく立つて、前脚をきれいにそろへました。

三二七



と、前の兎は、何か號令をしたと思ふと、小兎共は心得て、それ／＼寶物をおつぎましたが、兎は又春子に向つて、

「これからお供を致しますが、その代りもう一度、先刻の橋をお渡し下さいまし。」

と、云ふのでまた引かへして、以前の橋まで來ましたら、其所には藪の主の神が、又眷族大勢を連れて、同じく寶物を拜みながら、春子を待つて居りましたが、今度は橋を渡つても、少しも身體はしびれませんでした。



裸の宮

十里の間蔭もない、廣い裾野の道を辿つて、漸く山の麓まで來た玉男は、息は切れる、喉は渴く、全身はまた燃える様に暑い。

「ア、苦しい。何處か休む所は無いか知らず。水が欲しいもんだがなア。」

と、獨言を云ひながら、彼方の森の方へと急いだ。森は山の根につゞいて、別に道らしい道はないけれ



三三〇
ど、爪先上りに段々高くなつて居る。そして、上へ行
けば行くほど、木がいよゝく茂つて居るからそれ丈ま
た涼しくなつて来た。

こ、何所かで雷の様な音がした。しかもそれが段々近
く聞える。玉男ははやくも悟つた。

『占めた。溪流があるな。それこそ瀧か。何にしても
難有い。』

音を目的に急ぐこ、果して大きな岩の間から、瀧の
親類とも云ふ様なのが、丁度米を磨いだ様に、眞白に
なつて流れ落ちて居る。





玉男は思はず雀躍した。いきなりその岩に取りついて、手でしゃくつて一トロ口二タ口、三口までは夢中に飲んだが、四口めにホツ息を次いで、はじめて四邊を見まはすと、その水の落ちて居る下は、岩や石で圓く圍はれた所が、綠色にたまつて居て、まるで大きな浴槽の様になつて居る。

玉男はもうたまらなくなつた。

「よし、一杯浴びてやらう。何しろ汗がグツシヨリだ。」玉男はやがて衣服を脱いだが、岩の上に置いたので、飛沫がかゝつて濡れてしまふので、又そこから下



りて来て、此方の森の端の、大きな木の下の方の枝に、それをうまく掛けておいて、用意の手拭だけもつて、又元の溪流へ来ると、その浴槽の様な所へ飛び込んだ。入ると、中は随分深い。けれども游泳を知つて居る玉男は、ちつとも沈む事はない。身を切る様な冷い水も、熱した身體には、何とも云へない快さだ。

「ア、好い心地だ！ これですつかり蘇生つた。」と、玉男はもう得意になつて、ジャボく泳いだり、ブクリと潜つたり、疲れると岩へ上つて休んでた。ま



た飛び込んで浴びて居る。

丁度此時、玉男の衣服の掛けてある、以前の森の大木の、根下からヒヨコリ〜と現はれたのは、まるで小人島の力士の様な、二人の裸の小人であつた。

小人は小さな鼻をヒコ付せながら、

「クシツ〜！ 妙な臭氣がするぞ。」

「クシツ〜！ 何でも此邊だ〜。」

さ、木の枝を見あげたが、それに玉男の衣服を見つけると、

「あつた〜。あれだ〜。」



「なるほどく。變な物があるぞ。」

不思議さうに見あげた小人達は、丈伸して手を出したが、元より届かない。一人が一人を肩に立たせて、手を伸ばしたがまだ取れない。

取れないとなるさ、尙取り度くなる。で、いろく工夫した揚句、とうくその隣の木に、蔦のからんで居るのを見つて、それへ一入が昇りつくと、蔓を傳つて、枝を渡つて、とうさう此方の木へ移り、漸く衣服を枝からはづすと、それを持つて下へ投つた。下に待つて居た仲間の小人は、それを受け取ると、



直ぐにひろげた。所へ上のは飛び降りた。

かうして漸く衣服を取つたが、さてこれが何だか解らない。

「妙な物だぞ。」

「變な物だな。」

「まるで羽根みたいなものがあるぜ。」

と、ひろげて見たのはその袂だ。

「ヤアこんな穴がある。」

と、一人は袖口から潜り込んで、やつ口の所へ脱けて出た。



「これは一體何だらう？ 尻尾にしちやアをかきな所に付いてる。」

と、一人は附紐を氣にして居る。

「何にしても珍らしいものだ。こんな所に置くのは惜しいから、これを土産に持つてつて、大王様に献上しやう。」

「それが可い、く。」

と、二人はさんさひねくりまはした揚句、その衣服を持つて行かうとしたが、自分達の身體に比べるご、何しろ大きな物だから、ごても只では運べない。地を引



ずれば汚れてしまふ、切り離すのも勿體ない。どうしたものと考へたが、さすがに智恵が無くも無かつた。「よし、かうすりやア可いんだ。」

と、二人が裾の兩端をもつて、そこからクルく巻いて行つて、まるで絨段でも片づける様にして、衣服を長い巻物にすると、それを二人の肩にかついで、ヨチくしながら歩き出した。

此方の玉男は先刻から十分水を浴びたので、今はすつかり涼しくなつたから、ドレ此勢で出かけやうご、岩へ上つて身體を拭いて、それから以前の木の所へ來



て、また衣服を着やうとするご、た
しかに掛けておいた杖に、その影も
形も無い。

「オヤツ……風で飛んだの
かな？」

と、其邊を

さがしたが
落ちて無
いので、

「そんなら



三三〇



盗賊に取られたかな？」
と、尙八方に目を配ばると、丁度彼方の山の方の、岩
ご岩ごの間の所に、何だか動く物がある。
よく見ると、形はまるで變つて居るが、柄はまぎれ
もない自分の衣服だ。

「なんだ、あんな所に落ちてらア。」
と、云ひながら駈けて行つて、そ
れを取らうとすると、驚いた。衣
服は落ちて居るのではなく、變な
小人に擔がれて居るのだ。

三三一



「ヤイ待て！」

と聲をかけたが、小人は平気で先へ行く。それがつい鼻の先なのだから、手を伸ばせば直ぐ取れさうで、さして届かない。もう一ト足で追付きさうで居て、さて何うしても追付かない。

小人は相變らず、ヨチ／＼行く。玉男はセツセと追つて行く。

鹿を追ふ獵師は山も見ないさ云ふ。その通り玉男も、自分の衣服を取りかへさうと許りに、夢中になつて追つかけたので、何處を何う通つたか、途中の景色はま



るで氣が付かなかつた。

その中に立派な御殿の前へ出た、

見るとその門の左右には、小さなキユビーを見る様な奴が、仔細らしく番をして居たが、衣服を擔いで来た小人を見るさ、

「なんだ／＼、その荷物は？」と聞く。

「大王様への献上物だ。はやくお取次をしてくれ！」と云ふさ、ヨシと云つて奥へ行つたが、その時はじめて立止つて、荷をおろした二人の小人は、後から来る



玉男の、圓裸の姿を見るに喫驚して、
 「ハ、ハ、ハ、ハッ！」
 と、平伏してしまつた。

二

玉男は何だか様子が解らないが兎も角衣服を取られて居るから、それさへ返へせば用はないと、いきなり衣服へ手をかけた。
 するに小人共は驚いて、
 「イエ、これは御勘辨遊ばして。」



と、急いで二人が抱へ込んでしまふ。
 「コラ、渡さんか、はやく渡せ。」
 と、云つたが先方は頭を振つて、
 「これ許りはさしあげる譯には参りません。同卒御勘辨遊ばしまして！」
 と許りだ。

一體御勘辨云ふ言葉は、謝罪る時に云ふ言葉だ。すれば此方の脱いでおいた衣服を、黙つて持つて来たのを謝罪るのかと思つた。それは渡さずに只御勘辨を云ふ、そんな蟲の好い話があるものかと、玉男は少



シムツとして、

「渡せよ云つたら渡さんか。こりやア僕の衣服だよ。」
と、云ひながら又引奪らうとする。二人はそれにぶ
ら下がる様になつて、一所懸命に取りかへさうとする。
「コレ、放せよ云ふのに、強情な奴だなア。」

玉男が衣服をふりまはすと、それにくツ付いて一所
に振られながら、まだ二人は放すまいとしたが、その
弾みに袖の縫目が、ビリ／＼と綻びる。それに小
人は抱きついたまゝ落ちて、玉男の手には胴だけが残つ
た。



所へ以前の門番の小人が、奥から出て来てこの體を
見る。いきなり二人の小人を助けて、それ／＼に抱
き起こしながら、また玉男を見て、

「ヤイ、お前は一體何者だ？ 何の爲めにこゝへ来て、
私の仲間を酷い目に會はすんだ？」
と、一ばし力んで答めたが、その聲は慄へて居た。

「また以前の小人は、
「まあさ、そんな事は何うでも可い。うか／＼すると
捻りつぶされるから、はやく奥へ行かう。」
と、門番の小人を急ぎ立てながら、自分も一所に逃げ



三三八
 込んだが、その時も切れた袖は、二人で一つづつ、大切に抱へて、そのまゝ奥の方へ入つてしまつた。

玉男は只呆れる許りだ。

「何の事だい馬鹿々々しい。衣服を袖無しにしてしまやがつた。けごも裸より可いだらう。」

と、ブツ／＼云ひながらその衣服を、又元の通り着やうとする、急に奥から聲がして、

「待つたく！ しばらく待つた。それを着るのは無用々々！」

玉男は餘儀無く手を止めて、ちつと奥の方をのぞい



ニ
 たが、まだ誰も出ては来ず、
 又しても聲がして、

「そこにある字が讀めないか。讀めたら衣服は着られまい。」と云ふ。



「なんだ、其所にある字？ 何所にそんな字があるのだ？」と、玉男は改めて目を配ばるゝ、その時はじめて気が付いたが、門の上に額があつて、それに文字のかいてあるのを見ると、正しく「裸の宮」と讀めた。裸の宮？ なるほごこれは面白い。道理で衣服を持つて來た奴も、またこゝの門番も、みんな圓裸だと思つた。

そこへまた乃公までが、衣服を取られて、裸で來たのか。考へるゝ不思議な縁だな。よし、それちやア乃公もこのまんま、裸で奥へ通つて見てやらう。



玉男は度胸をきめて、袖無しの衣服を抱へたまふ、まづ門を入つて、奥の方へ通らうとした。すると左右からバラ／＼バラと、裸の小人が十人許り出て來て、丁寧に玉男を迎へて案内に立つ様子が、何だか前以て手筈が出來て居て、自分を待つて居た様にも見える。

何にしてもかまはない。相手は高の知れた小人だ。別に恐い事もあるまいと、平氣でそれに導かれて行くと、やがて綺麗な御殿へ出たが、其所はまた不思議な事に、床も柱も天井も、残らず水晶で出來て居るので、



何も彼も皆透とほつて見える。

だからその次の次の、そのまた次の室の方に、人の居るのまでよく見えるが、その一番奥の所に、頭には冠を被つて居るが、體はやはり圓裸の小人が、他の小人の捧げて居る物を、しきりに眺めて居る様子まで、玉男にはまるで手に取る様だ。

「ハ、ア、あれがこゝの王様だな。さうして今持ち込んで行つた、乃公の衣服の袖を見て、不思議がつて居るのだな。なるほど裸の宮ならば、衣服は珍らしいに相違無い。フム、面白い所へ來た。」



と、玉男は思はずニツコリした。すると、その奥から一人の小人が出て來て、丁寧に辭儀をしながら、「これはくお客様！ ようこそ御出で下さいました。只今王様がお目に掛りますから、何卒これへお控へ下さいまし！」と、云ひながら椅子をくれたが、





それは小さいので掛けられないから、直に床に胡座をかいて、例の水晶で冷いので、思はずヒヨイ尻を浮かした。

それを見ると小人達の方が、今度は一時にクスリと笑った。

所へ裸の王が現はれて、静に正面の椅子にかけたが、それも水晶で出来て居るのに、何一つ敷いても掛けてもない。

玉男はまづ挨拶して、

「私は初めて来ました、貴君が裸の宮の王様ですか。」

「云ふさ、裸の王は軽くうなづいて、

「いかにも此宮の主だが、今日は私の家来共が、珍しい物を拾つて来たので、ついお前さんに會ふ事が出来て、こんな嬉しい事はない。」

「さ、體は小さいが、云ふ事は大きい。」

玉男はそれに次いで、

「その珍らしい物と云ふのは、實は私の衣服ですが、持つて行つたのは袖許り、胴は此方に残つて居ります。これを一所にしなれば、満足な衣服さは申されませぬ。さ、これをあげますから、付けて御覽なさい。」





と、持つて居た胴を

渡すと、家

来の小人が

七八人で、

その端を大

切にさゝげながら、王

の前におしひろげた。

王は立ちあがつてつくつく見

ながら、

『さうして先刻の物は何所につくのか。』



『あれは此所へかうつくのです。一寸貸して下さいまし！』

玉男は袖をうけ取つて、縦びた所へそれくあてし

『ソレ、かうして此所へつけさへすれば、それで立派

に着られるのです。』

さ、委しく話して聞かせると、王は感心して居たが、

『なるほごこれが衣服ご云ふものか。私は初めて見物

する。お前方も元より初めてあらう。さア、苦しう

ない、近うよつてよく見せてもらへ！』

と、家來共に云ひ渡すと、大勢の小人は待ちかねた様



に、そのまはりを取りまいて、しきりに感心して眺めて居る。

三四八

三

王はまた不思議さうに、

「しかし全體こんな物を、何うしてお前方は着て居るのだ？」

と聞く。

「では一つ着せて見せませうか。これは斯うして着るんです。」



云ひながら玉男は、その衣服を取りあげて、直ぐに手を通さうとするこ、先刻門の所で聞いた様な聲で、

「待ったく。しばらく待った。」

と云ふ。

誰がそんなに止めるのだらう？

玉男はあたりを見

まはしたが、誰も見えない。關はず又着やうとすると、又待ったくと云ふ。

けれども、玉男はもう耳にかけず、やがてそれへ手を通して、すつかり衣服を着てしまひ、

「さア何うです。解りましたか。」

三四九



云ひながら衣服を着た所を、よく小人達に見せてやらうとすると、こは如何に?! 今まで自分の周囲に居た小人共は、王も家来も皆消えてしまひ、その上立派であつた御殿まで、影も形も無くなつて、自分は何時の間にか初の通りの、森の木の下に立つて居る。

「なアんの事だ? まるで夢でも見た様だ。」

思はず玉男は呟いた。

するこ又目の前に、ヌツと現はれた者がある。顔も髯も鼠色の長い毛に被はれた爺さんだが、身體には一面に、木の葉を綴りあはせた物をまとい、自然木の





長い杖をついて居る所は、晝で見る仙人そのまゝだ。

玉男は思はず一步退がつたが、まだ物も云はずに居るこ、爺さんは聲をかけて、

「惜しい事をしたなア。」

と云ふのが、何だか聞いた様な聲だ。

「何がです？」

と問ひ返へすと、

「お前は折角裸の宮へ行きながら、衣服を着てしまつた許りに、また追ひ返へされてしまつた。わしが折角止めるのに、聞かないから悪いのぢや。」



と云ふ。

それで思ひ當つたのは、先刻から待つたくと、何所からか聞えたあの聲だ。

「それぢアお爺さん！ 貴君だつたんですか。」

「如何にもわしぢや。」

「何故止めたんです？」

「考へても解るぢやないか。裸の宮は裸の世界、衣服を着ては居られんのぢや。」

「さう云へばさうでしたねエ。」

こ、玉男は頭を掻きながら、



「ほんごに僕は気が付かなかつた。もう少し彼所に居
たかつたのに。」

「全く惜しい事をした。今少し彼所に居つたら、面白
い事があつたのぢや。」

「ごんな事がありましたらう？」

「裸の宮に居るものは、身に何物も着けぬ通り、心に
何の飾りもなく、何も彼も見通しぢや。」

「全くさうでした。家も硝子で出来てました。すつか
り奥まで見え透くんです。」

「それだから誰も彼も、少しも悪い事は出来ん。皆正



直な者許りぢや。そこへ行くと世の中の、衣服を着て
居る者共は、眞の心は持つては居らん。淺ましいもの
ぢやてなウ。」

と、嘆息をつく様に云ふ。

玉男はちつと見て、

「さう云へばお爺さん！ 貴君の着てるのはそれは何
です？」

「これは又私達の衣服ぢや。」

「木の葉許りぢやありませんか。」

「さやう。皆木の葉のまゝ着て居るのぢや。」



「何故ほんごの衣服着ないんです？」
 「ほんごの衣服に着飽きたから、それで今ではかう云
 ふ物を着て居る。イヤ、わしも、實は裸で居たいのぢ
 やが、なまじ稚い時から着せられて、衣服に馴れてし
 まふたから、今更裸で居る事も出来ん。」
 「をかした物を着るんですねエ。身體が痛かアありま
 せんか。」

「イヤまことに着心地は好いぞ。」

「へエ妙なものですねエ。」

「玉男はさも感心した様に、側へ寄つて来て手で觸ら



うとすると
 爺さんは手
 ではらつて

「い

かん

く

觸つ

ちやいかん。

お前の様なものに觸

られると、木の葉がみん





な枯れ落ちてしまふ。」

「オヤそれぢやアソウツとして置けば、何時までもそんなに青いんですか。」

「さやう。わしの様な者が着てさへ居れば、何時までたつてもこの通り、新しく青々として居るのぢや。」

「それぢやア何時こしらへたんです？」

「今年でもう五十年ほご着るが、何時もこの通り青々として、まだ一枚も枯れ落ちはせん。」

「なるほど不思議なものですなア。」

「これでもお前の様なものが着れば、三日の中には黄



色くなり、七日十日と着る中には、皆枯れ落ちてしまふぢやらう。」

「何故でせう？ をかしなものですなア。」

「それはお前が、まだ衣服と云ふものを、着なければならん人間だからぢや。」

「それぢアお爺さんは人間ぢやないんですか？」

「わしは仙人と云ふものぢや。」

「やつぱり仙人なんですネ。すると先刻の小人達は？」

「あれは又わしとも違ふ。」

「どう云ふ風にちがふんです？」



「まづわし達仙人は、お前方の出来る事が出来る。たとへばお前は夏はあつく、冬は寒くて困るだらう。わしにはそんな事はない。夏でも冬でもこの通り、同じ物を着て居ればすむのぢや。お前方は日に三度宛、飯を食はねば生きて居られまい。わしなどは何も食はんでも、露を吸うて生きて居る。お前方は一日かゝつても、やつと十里ほごより歩けまい。わしは五十里が百里でも、行かうと思へば瞬く間に行ける。まづざつこそんなものぢや。」

「ほんとに重寶なもんですねエ。するごあの小人達は



まだその外に出来る事があるんですか？」

「それはまた格別なものぢや。わし達の出来る位の事は、皆小人も出来る上に、更にお前方と同じ様に、世間の事が出来るのぢや。そこへ行くご残念ながら、わしには世間の事は出来ん。」

「世間の事ご云ひますと？」

「凡て人間のする事は、皆小人もやつて居る。その上仙人の力があるものぢやから、まづわし等より一段上ぢやナ。」

「すると、その上は無いでせうか？」



「その上は即ち神ぢや。」

「へエ、神様に？ あんな小さな裸坊主が、そんなに偉いんでせうかねエ。」

「小さいからえらいのぢや。裸ぢやからえらいのぢや。」

「そんなに偉いものだと知つたら、もつと彼所に居ればよござんしたネ。」

「だから私が止めたんぢや。」

「よし、それぢやア僕アもう一遍行つて來ます。何もそんな物無くたつて可いんです。」

云ふ中にもう思ひきつて、玉男は手ばやく衣服を脱



いだ。

脱ぐと今までの仙人は、また何所へか消えてしまつて、再び元の裸の宮の、裸の王の前に來て居た。が、今の仙人から聞いた事もあるので、急に小人が偉く思はれ、その前に手をついてしまつた。

四

玉男が丁寧に辭儀をすると、裸の王は却つて手を振つて、

「これさく、さう恐縮する事はない。」



と、玉男たまをの側そばへよつて来て、その脱ぬいだ衣服きものに手てをか
け、まだ氣味きみ悪わるさうに眺ながめながら、

「なるほごこれが衣服きものと云いふものか。妙たうな恰好かっかうをして
居ゐるものぢやな。」

と、感心かんしんして居ゐたが、

「一つ私わたしも着きて見みやうか。」
と云いひ出だした。

玉男たまをは今いま仙人せんじんから聞きいたのでは、裸はだかの王わうは裸はだかだから
偉たかいと云いふ事ことだが、その王わうはまた衣服きものを見みると、何なんだ
か着きて見みたさうにして居ゐる。



「面白おもしろい、これは一つ着きせて見みてやらう、さうしたら
何なん様な事ことがあるか知しら？ かう考かんがへるご玉男たまをは、わざ
と眞面目まじめになつて、

「王様わうさま。御望おのぞみとあれば、これはさしあげても宜よろしう御
座ざいます。然しかしこのまゝでは寸法すんぽうが合あひません。大おほき
すぎて仕方しかたが御座ございませんから、私わたしが巧たくしく拵こしらへ直なして
さしあげませう。」

「それはどうも難有かたがたい。では然しかうして貰もらはうか。」
「畏かしこまりました。」

と云いふ中に玉男たまをは、自じ分の衣服きものの糸いとをほどいて、袖そでも



三六六
胴もはなしてしまひ、それから其巾をよい加減に切つた。けれどごも針も糸もないから、元より衣服の形は出来ない。仕方がないからその中央の所へ、小さな圓い穴をあけて、それへ首を突込む様にしたら、まるでマントウの様な物が出来た。
「さアどうやら出来ました。一つ着て御覽なさい。」
と、それを裸の王に渡すに、王は玉男に教つて、その穴へ首を通して、布を自分の身體につけると、まるで子供の様に嬉しがつて居る。
「こりやアほんごに妙なものぢやな。」



「ごうです。好い心地ですか。」
「何だか重い様なうつとしいものぢやな。」
「今まで裸で居らしたのですから、さうお思ひになるのも御道理です。」
こんな話をして居るのを、他の家來の小人達は、さも羨ましさうに見て居るので、玉男はまたその方を見て、
「どうです、君達も着て見たいかネ。まだ巾はこんなにあるから、着たけりや一同にもこさへたけますよ。」
と云ふと、一同は口を揃へて、



「ごうか願ひますく。」

と云ふ。そこで玉男は、急いで残りの巾を切つて、今
のと同じ様なのを澤山こしらへ、これを家來の小人達
にも、皆一々着せてやつた。

すると王も喜んで、

「イヤこれは面白い。お前達にも衣服が出来たか。」

と、目を細くして眺めて居たが、その中に家來の一人
が、

「王様はじめ私共まで、かうして衣服が出来ました上
は、このまゝ此所に居りますのも、何だか勿體無い様



に存じます。如何で御座いませう。一つ隣の國へ参つ
て、一つ羨ましてやらうちや御座いませんか。」
と云ふと、王もうなづいて、

「なるほど、これはよい所へ氣がついたな。では一つ
押かけて行つて、隣の王を羨ましてやらう。客人には
氣の毒ながら、しばらく留守を頼みますぞ。」

「ハアそれなら遠慮無く行つてらつしやい。私はまた
圓裸ぢやア、何所へも行く事は出来ないんですから、
こゝでおとなしく御留守番して居ります。」

「では一寸頼みますぞよ。」



かう云ふ中
に裸の王、否、
今は風呂敷の
様な物を着た

王は家來
の小人を



皆連れて、さも得意さうに出て行つた。

この時玉男は、門までこれを見送つたが、それから
又元の御殿へ來ると、何うした事か先刻まで、すつか
り硝子で透き通つて居た、柱も床も天井も、何時の間
にか只の木造りになつて、今は何も見透かなくなつた。
不思議な事もあるものだが、玉男は頭を傾けたが、
まだそれよりも不思議なのは、先刻裸になつた時は、
何だか寒氣がした様であつたのが、今は少しもそんな
心地もせず、却つて如何にも晴々とした、何とも云は
れない氣分になつて居る。



「はてな……裸はよつほど工合の好いものだな。それに何だか自分ながら、段々偉くなる様だぞ。……オ、硝子の御殿は見えすかなくなつたが、かうして空を見て居ても、何だか遠くがよく見える様だ。オ、何か見えるく〜」

と、彼方をきつと見るこ、其所では今の小人達が、他の小人の仲間へ行つて居るのに、何だか皆から冷評されたり、罵られたりして居る様子だ。

「可哀さうにあの連中は、大威張で出かけて行つたが、あの態は何うしたんだ。まるで意氣地が無いぢやない



か。ア、王もさうく泣き出した様だぞ。ソレ逃げて来るく〜」

こ、云ふ中にもう以前の王は、折角着せてやつた衣服をぬいで、一目算に駈けて来たが、やがて玉男の前へ来るこ、

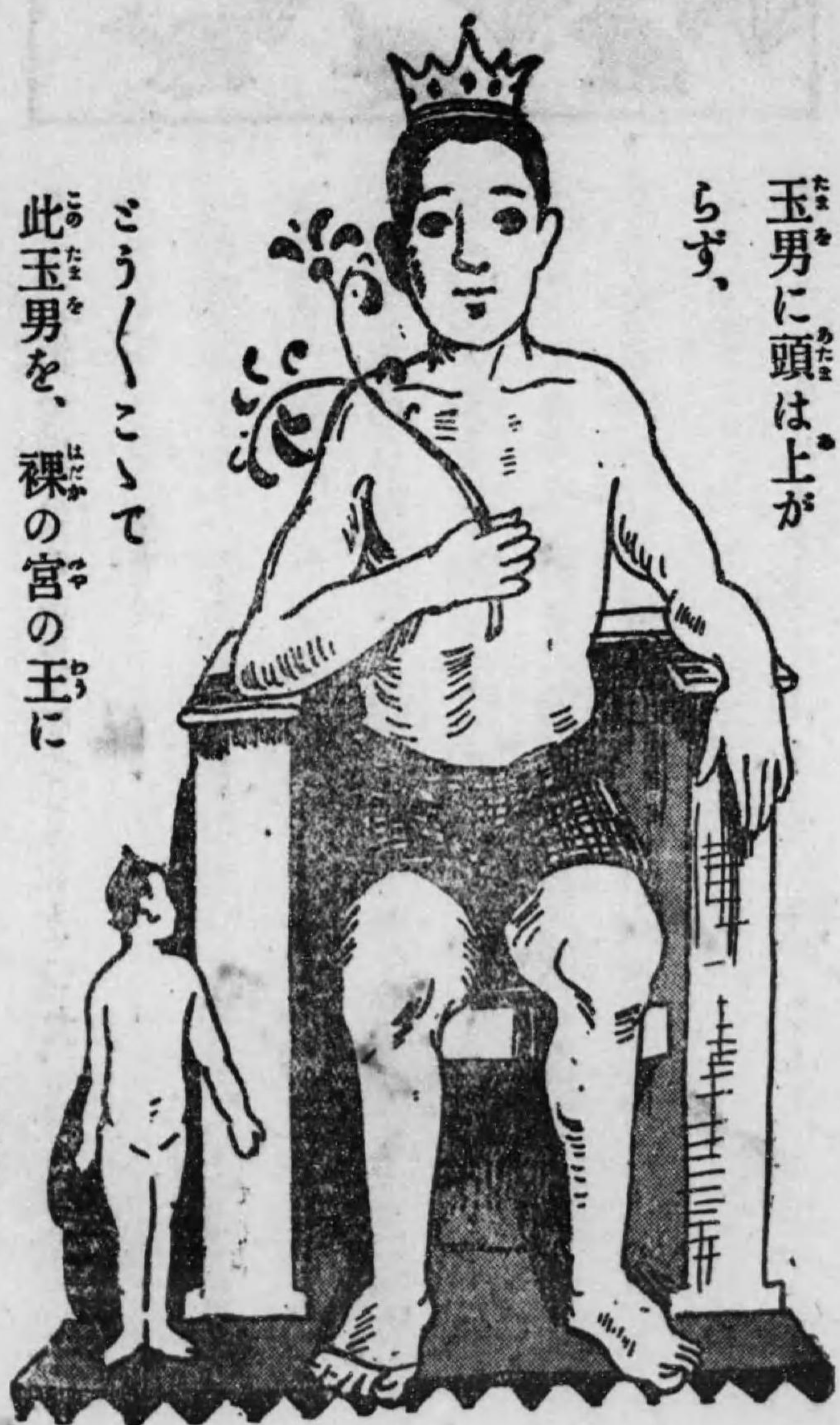
「イヤ、飛んでもない目にあつた。こんな物を着せられたおかげで、今まで出来る事が何もできず、今までにうけた事もない侮辱をうけ、今までついに覺えた事もない極りの悪い想をしてしまつた。もう懲りく〜だ。こんな物は返へす。」



三七四
と、玉男の前へ投げ出した、所が玉男は受取らない。
今はぐつと強味になつて、

「馬鹿云つちや困るぢやないか。こんなに小さくしてしまつちやア、もう私にも着られないよ。イヤ、私も先刻から裸になつて此所に居るし、すつかり此所が氣に入つてしまつた。これから私は此所に居て、今日から代りに王様になる。お前達は家來だぞ。」と大聲で威しつけた。

その聲は御殿中にひびいて、小人の耳には雷の様だ。王をはじめ家來の小人は、この勢に恐れ入つて、再び



玉男に頭は上がらず、

さうくこゝで
此玉男を、裸の宮の王に



して、皆で崇める事になつてしまつた。



鶯の醫者

今年は大へん悪い風が、はやりました。それで人間は、大分やられました。風の神は圖にのつて、今度は鳥や獸まで吹いてまはりました。

ある家のお庭に、一羽の鶯が棲んでおりましたが、ある朝その鶯はいつものやうに、大きな口をあけて、好い聲で歌を唄はうとしますのに、急に咽喉がつぶれてしまひました。

やつこのことでホウ……とまでは出ましたが、あと



三七八
のケキヨが、ごうしても出ません。あまり一生懸命になつて聲をしぼり出さうとすると、頭が痛くなつて来て、はては目が眩みさうになりましたから、鶯はびつくりして、

「これは大變だきつと私も風邪を引いたんだ、ごうしたら可いだらう？」
と、只さへ青い鳥が、なほ青くなつて、心配しました。不圖、思ひ出したのは、お医者様のことでした。と、いつて 鳥仲間では誰がお医者だか、それが少しも解りません。で、これにも亦困つてをりましたが、



「まゝよ。人間は生物の中で、一番えらい者なのだから、そのお医者様に頼んだら、私だつて癒らないところはあるまい。」
と、かう考へたものですから、鶯は痛い頭を抱へて、近所のお医者様の所へ來ました。
まづ玄關へ行つて、「おたのまうす」と呼ばうとしましたが、それさへ聲が出ません。
仕方が無いから、その柱を、嘴でコツ／＼叩きますと、中から取次の者が出て、
「今叩いたのは、お前か？」



と、聞きますから、

「へい、私でございます。」

「小さな聲でいひますと、取次の者は不思議がつて、見れば鶯のやうだが、鶯なら鶯のやうに、何故好い聲で鳴かないんだ？」

「へい、それが鳴ける位なら、わざわざ、お願いに出やしません。私はこのごほり、咽喉がつぶれて困つてゐんです。どうか先生におつしやつて、よろしく御療治をねがひます。」

とあはれな聲でいひますと、



「さうか。それは可哀さうだなア。では此方へ、通るがよい。」

と、奥へ案内してくれました。

奥にはお醫者の先生が、ちやうど家にゐましたから、取次の者に理由をききますと、

「それはなるほど可哀さうなものだ。私も鶯の聲は大好きなんだが、出なくなつては聞かれないから、すぐ出るやうにしてやらう！」

と、これから親切に診てやつて、薬をつけたり濕布をししたりして、



「さア、これで可いから、今日は一日風に當たらな
様に静かに巢で寝ておいで！さうすればすぐになほる。」
と、いひますので、鶯は大喜び、

「難有たうございました。これですつかりなほりまし
たら、お禮には、これから毎日、此方のお庭へ来て唄
ひます。」

と、しきりに禮をいつて歸りました。

それから鶯は、巢で一日臥てをりましたら、咽喉は
だん／＼よくなつて、翌朝起きた時には、もう立派に、
「ホウホケキヨウ、ケキヨ／＼／＼／＼」



と、うたひました。

すると、これを聞きつけたが、同じ森の鴉でしたが、
いかにも鶯の聲が好いので、

「どうして、そんなに唄へるやうになつた？」
と聞きますから、

「彼所のお医者様に、なほしてもらつた。」
と話しますと、

「よし、それぢやアおれも行つて、一つ好い聲にして
もらはう。」

と、いつもは鴉の眞似をする鴉が、今度は鶯の眞似を



して、お醫者の所へ来て、

『どうか、私も咽喉をなほして、好い聲の出るやうに
して下さい！』

と云ひましたら、お醫者様は頭を振つて、

「イヤ、お前にその上大きな聲で鳴かれては、そ
れこそやかましくて困るからいやだ。」
といふので、どうしても診てくれませんでした。



白い鳥

ある國の王様は、大そう珍らしい物がお好きでした。
それで毎年のお正月には、國中の者からお年玉に、成
るだけ珍らしい物をさし上げ、そしてその中で、一番
珍らしい、一番お氣に入つた品を、献上した者には、
その御褒美として、一番好い勳章を、下ださる事にな
つて居りました。

去年のお正月には、丁度午の年だったので、頭に角
のある鹿の様な馬を献上して、御褒美をいただいた者



三五六
がありました。今年は未年だから云ふので、また銀色の羊の肉をさしあげましたから、これではまた珍らしくないと云ふので、もつと變つた物をお求めになりました。

するご、ある山の中で、誰かが白鳥を見かけたといひ出しました。それは雪の降る中に、鳥の死んで居たのを見たのでしたが、王様はお聞きになつて、それこそ世界一の珍らしい物だから、是非手捕にして參れと、嚴しい命令で、家來が大勢支度をして、その山へと押しかけて來ました。



山には木が茂つて居て、鳥が澤山棲んで居たのですが、これを聞くに屹驚して、

「一體、何所にそんな奴が居るのか知らないが、はやく捕まいてくれないと、他の鳥が傍杖をくらつて、こんな迷惑な事はない。」

と、鳥仲間には氣が氣でありませぬ。

中にも山の主の親方鳥は、子分の鳥を集めまして、抑も鳥と云ふものは、神様のお手に造られた時分は、まだ色は極まらなかつたのだ。その後お日様の眷族になつて、始終お側で焦かれたものだから、頭も脚も目